

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	永代美知代「少女小説 大火の後」論：少女小説に記録された火災
Author(s)	奥村, 尚大
Citation	国文学攷, 248 : 15 - 27
Issue Date	2020-12-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051478
Right	Copyright (c) 2020 by Author
Relation	



永代美知代 「少女小説 大火の後」論

——少女小説に記録された火災——

奥村尚大

はじめに

東日本震災以後、多くの文学作品が再読され、論じられた。あるいは、震災後に発表された作品に關しても多くの論考が書かれている。しかしながら、その論点は放射能や津波などの被害や政府の対応、それらに対する作家の反応が中心化されているように思われる。当然ながらこれらの論点が必要なものであり、その有効性に対して何ら意見を述べるつもりはない。ただ、本論で試みとして行いたいことの一つは災害からの避難行動という、いわば災害を描いた文学作品において周縁化された論点に光を当てることである。

災害研究の分野では「災害文化」という領域が存在し「災害文化とは災害常襲地のコミュニティに見出される文化的な防災策と定義され、災害の抑止や災害前兆の発見、災害発生後の対応において人々のとるべき対応を指示する。災害文化も他の文化と同様に、住民間

に共有されている価値、規範、信念、知識、技術、伝承などによって構成される」と定義されている¹⁾。災害直後の避難行動も一つの社会的に構成された文化であることを踏まえると、当然、文学作品において描かれた災害時の避難行動も絶対的なものではなく、時代や地域によって異なった避難行動が記録されている可能性が高い。あるいは、描き込まれた避難行動を通じて社会的に認められていた価値観を抽出することが可能であると考える。

本稿では、「災害文化」の視点や問題意識から刺激を受けた文学研究として、自然災害ではないものの、大正初期の少女小説に描かれた火災からの避難行動に関する表象を一つの論点に、永代美知代「少女小説 大火の後」(『少女』四号、一九一三年四月 以下「大火の後」)を論じる。この作業を通じて、「大火の後」が持つ記録性の評価と、避難のイメージとジェンダー規範の関わりから自由ではなかったという限界を把握し、「大火の後」の位置づけを行って

きたい。また、それによって文学研究における「災害文化」的な視
点の有効性・可能性を示したいと考えている。

岡田（永代）美知代（一八八五年―一九六八年）は、田山花袋『蒲
団』に登場する横山芳子のモデルとして知られている。翻訳や少女
小説など多様なジャンルで多くの作品を書いた。本論で注目する
災害に関して言えば、「大火の後」が発表される以前に大分県佐伯
を襲った洪水を描いた「小説 洪水の後」（『婦人評論』第二巻六号
一九一三年三月）が書かれている。

一方で、有元伸子が述べるように「蒲団」の女主人公・横山芳
子のモデルとして強大なフィルタのもとで扱われ、小説家・翻訳
家としての彼女自身に言及されることは極めて少ない」という状況
である。現在、ホームページ『広島の女性作家 岡田（永代）美知
代』が公開されるなど、作品に触れることはかつてよりも容易になっ
た。また、個々の作品の分析も進められている。それでも多くの作
品が分析されなまま残されており、今後の研究が期待される。な
お、先行してなされた美知代の少女小説に関する分析としていくつ
かの研究が挙げられるが、「大火の後」は分析対象に入っていない。
美知代に関する研究においても、まだ注目されていない作品である
ということが出来る。

しかし、「大火の後」はこれから確認していくように「神田大火」
と呼ばれる実際の火災を描いた作品であるという点で、美知代作品

の中だけではなく、少女小説というジャンルから見ても特徴的な作
品であるといえる。モデルとなった「神田大火」は、一九一三年二
月二〇日の午前一時一五分に発生、同日八時三〇分に鎮火した。火
元は救世軍大学殖民館湯殿で、死者二名、焼失戸数は二〇一八戸と
されている。神田区が被災地であったこともあり多くの学校が焼失
した。「大火の後」が発表されたのは「神田大火」から約一カ月半
後の『少女』四号においてであるから、火災発生から非常に短いス
パンで執筆・発表されたことがわかる。そのような執筆背景も作品
の注目すべき特徴の一つだろう。

以上より、「大火の後」を論じることは、災害を描いた文学に関
する研究、少女小説に関する研究、そして岡田（永代）美知代に関
する研究など、多くの研究分野に対して接続可能なものであると考
える。

一、モデルの推定

分析に入る前に「大火の後」の梗概を確認する。作品は全三章で
構成されており、第一章の「乱打される警鐘」では、寮で眠ってい
た慶子は火事を知らせる警鐘の音で目を覚ます。慶子は両親の形見
である写真を持ち出そうとするが、同室の友人とぶつかり落として
しまう。慶子は写真を探すが、見つからず、そのまま避難せざるを
えない。第二章の「火事場のあと」では、火事の翌朝、慶子の友人

のます子は学校が焼けたことを知る。父は火事場の後は危ないため学校を休むように言うが、慶子が心配なます子は火事場に向かう。学校によやくたどり着くと門番の爺やから慶子は「駿河台の武田さん」のもとへ避難したと知らされる。第三章の「玉川砂利の道」においてはます子は武田の家でます子と再会する。慶子は親のいない自分以外の級友たちは親族が迎えに来て、避難所から帰ったこと、両親の写真が焼けてしまったことと、位牌だけは持ちだせたことをます子に話し、物語は終わる。なお、「胴桐の火桶を抱いて」や「小路に立った霜柱を」という表現から作中の季節は冬に設定されていると考えられる。

火災に関する描写の中でモデルを推定できる場面として、「今暁一時半神田三崎町三丁目救世軍大学館三階より出火せり夜来の烈風は附近熟睡中の市民が身を以て避難する間も無く忽ち地を匍ふが如くに広がりて四辺を火の海と化し東南に向つて延焼しつゝあり市中の各消防警官等は勿論軍隊よりも出動して極力消防に従事しつゝ、あるも風威に乗じたる猛火は何時鎮火すべくも見えず只今迄に已に二百戸を焼き尽くせり。(午前二時記)と読んで居ると、新聞を持つ手がわなわな震へて来ました」という記述がある。⁷⁾この記述はます子が読んだ新聞の「欄外」に書かれた記事として登場した。現実の「神田大火」についての『朝日新聞』の記述は「今暁一時半神田区三崎町の二十一救世軍殖民館より発火し折柄西北の風吹き頻り

しかば同館を焼き落したる後火の手は見る見る四方に拡がりて附近の消防署より駆付け消火に死力を傾注したるも遂に消切れず二時十分迄に既に約八十戸を焼失したり、(中略)尚急を聞きて近衛歩兵第一、二連隊より各二個中隊宛出動し大活動を開始し居れるも未だ鎮火の見込立たず只今猿栗町方面へ飛火し既に二十戸を焼きたり(二十日午前二時半)⁸⁾となっている。冬の深夜に救世軍において出火した火事⁹⁾で、軍隊も出動したことが述べられているなど、共通点が多く、「神田大火」がモデルとして書かれたことは、ほぼ間違いないのではないか。

それでは、ます子と慶子の通う学校のモデルはどこだったのだろうか。結論から述べると、仏英和高等女学校(現・白百合学園)である。推定できる場面として、以下の二つの場面がある。一つ目が「それを買って見ますと、三崎町から猿栗町へ掛けて一面黒く塗られた中に自分の学校がありましたので、ます子は今更のやうにハッとしました」という焼け跡で「号外屋」から買った新聞を読む場面である。この記述から、ます子の学校が「神田大火」の焼失区域内にあったことが推定される。¹⁰⁾次に確認したいのは、学校の焼け跡にたどり着いたます子が「門番の爺や」と会話をしている場面である。

『寮の皆様は?』

『先生方と御一緒に駿河台の武田さんへお立退きになりました』

『あらさう！』

武田と云ふのは同窓会の会長で、この学校第一回の卒業生の家なのです。ます子はその番地も邸もよく知つて居りました。

以上のやり取りからわかるのは、慶子を含む寮生や教師が「駿河台の武田」の邸宅へと避難したということである。実際の「神田大火」に関する『読売新聞』の報道において「▲仏英和女学校 の寄宿生徒は全部無事に裏猿楽町六原田方に避難せり(後略)」¹⁾とされている。「裏猿楽町六原田方」とは華族の原田熊雄の邸宅を指していると考えられる。『白百合学園創立百周年記念誌』においても「このときスールたちが寄宿した駿河台の原田家というのは、はっきりした確証はないが、前後の事情などから考えて、男爵原田熊雄の生家とみては、間違いなまいであろう」²⁾「原田熊雄の生家は、焼失した修院、学校に近い裏猿楽町6番地にあり、敷地3,000坪の宏壯な邸宅であった」³⁾と述べられ、原田熊雄の邸宅が避難先であったと推測している。新聞で示された「裏猿楽町六」という記述とも一致するため、原田熊雄の邸宅に避難したと考えて間違いない。つまり、「駿河台の武田」は原田熊雄をモデルにした登場人物だと考えられる。

他に読み取ることができる学校の特徴として、ます子は「仏蘭西大使館」から来た「年若い貴婦人」⁴⁾とフランス語で会話を交わしている。そこから、ます子と慶子の学校ではフランス語を学ぶこと

ができたと考えられる。同時期の学校案内を確認すると、仏英和高等女学校はフランス語や英語などの外国語教育に「全力を注いで居る」⁵⁾ことや生徒の多くが寄宿生であったことが確認できる。これらの情報を総合すると、ます子と慶子の通う学校のモデルは仏英和女学校だったことは間違いない。火災からの避難の流れに関しても仏英和高等女学校をモデルにしていると考えられる。したがって、同時代の読者はこの作品を「神田大火」を扱った作品で、仏英和高等女学校をモデルにした学校を舞台にしていると読んだのではないか。⁶⁾

ただし、原田熊雄をモデルにした人物であると考えられる「武田」という人物について「同窓会の会長で、この学校第一回の卒業生の家なのです」という記述が見られるが、確認する限り原田家になような事実はなかった。また、実際に華族だった原田熊雄の邸宅をモデルとしたであろう「武田」の邸宅について「敵しい、まるで華族様のお邸のやうな気取つた玄關先に立つ」と記述しており、「武田」は華族として描かれていないことがわかる。そこから美知代が「武田」と実際の原田熊雄とは別の人物として脚色し描こうとしたという意図が読み取ることができると考えられる。

しかし、『白百合学園創立百周年記念誌』においては「したがって、大正2年の大火当時、原田家には、家族としては母照子しかいなかった」とされており、原田家に避難したことについて「おそらく、

母校やスールたちの身を案じた西園寺新子姉あるいは西園寺公自身（中略）を通じて原田家に話があり、スールたちの寄宿なったものではないだろうか」と説明されている。¹⁷ その説明に基づいて考えると、西園寺新子という仏英和高等女学校の卒業生が避難に関わっており、それが美知代の事実誤認に基づくのか、意図的な脚色に基づくのかはわからないが、ある程度は実際の原田家の事情を作品内部に取り入れていたと考えられる。

以上、確認してきたように、「大火の後」のモデルの扱いの特徴としては実際の火災や学校をモデルとして使用しつつも、人物名を変える、学校の名前を出さないなど、固有名を避けて描いているのが特徴であると考えられる。

二、描かれた被災地

前節で確認してきたように、「大火の後」は実際の「神田大火」をモデルとしている。そうであるとするれば、どのように火災を描いたのかというのが重要になる。「大火の後」は美知代が書いた「火災に包まれゆく野呂さん」¹⁸や、同時期の少女小説である三津木春影「火事の晩」²⁰と比べると、明らかに火災の描き方に違いがみられる。

「火災に包まれゆく野呂さん」¹⁸は、××女学校の三年生の野呂お千香はクラスメートや下級生から「ぐづや」「薄野呂さん」というあだ名をつけられていた。二月のある夜学校裏のパン屋で火事が

起き、「私」の学校もそれに巻き込まれる。寮生たちは避難するが、北寮の二階の病室に一人で寝ていたために「佐野さん」だけが取り残される。「野呂さん」は制止を振り切って北寮へ向かい、火事から「佐野さん」を救出出す、というもの。

「火事の晩」の梗概は、仙子は花子と名付けられた西洋人形を寮へと持ち込む。人形は寮舎の評判になるが、「意地わる」で「にくまれていた」松子だけは人形を褒めなかった。ある時、人形が突然消えてしまう。仙子は探し回るが見つからなかった。その後、ある真夜中火事の避難訓練が行われる。寮生たちは規則通り小高い丘に集合する。寝ぼけていた松子は信玄袋の代わりに人形を持ち出してしまふ。その人形は失くしていた仙子の西洋人形であり、松子の盗みが発覚する。仙子は「いえ先生、もしほんとの火事なら、お人形も疾うに焼け死ぬ所でしたのに、松子さんが救ひだして下さったのですから……」と述べて松子の罪を許す、というもの。

以上より確認できるように、二作品に描かれた火災は緊急的な状況を発生させるための装置であり、それを通して「火事の晩」の場合は盗みの発覚が、「火災に包まれゆく野呂さん」では「野呂さん」の評価が一転するきっかけとなった行動が描かれるにとどまる。これに対して「大火の後」は、これまで確認してきた通り、多くの同時代的なコンテクストを作品の中に取り入れている。この点で他の二作品と比べると火事を描く態度が異質なものであると考えられる。

「大火の後」で、特に注目したいのは、題名からもわかるように火災の後の被災地を描いていることである。前半部の慶子に焦点を当てた火災発生直後の描写が視覚と聴覚から得られる情報についてのみ述べられているのに対して、ます子が焼け跡を訪れる場面は以下の引用からもわかるように嗅覚や生理的な反応も描かれている。

成る程、焼跡と云つても、四辺一面焼け渡つた家々の屋敷跡から、プスプスと烟が立ち昇つて、如何にも物凄ひ惨憺たる光景である。歩く度に灰が立ち舞ふて、いぶい烟と一緒に眼口を襲ふた。暫らく行くうちにます子は幾度となく涙ぐんで来る眼を拭いたが、拭いても／＼後から後から涙が湧いて、鼻の奥がヒリ／＼するやうにも感じるのでした。

此処にも其処にも大勢の人だかりして居て、焼けた品物を片附ける人夫の傍に立つたきり、馬鹿かと思うやうな呆然した容子の主人らしい男もあつた。

このような描写の違いから考えるに、美知代自身が実際に被災地を訪れて取材したか、被災地に訪れた人から話を聞いた可能性は高いと考えられる。そのため、この作品の記録性が表れているのは、ます子が焦点化されている場面であると言える。なお、晩年の美知代から英語を教わるなど親炙した原博己氏によると、美知代の妹の

萬壽代は白百合出身であつたという²¹。相澤芳亮は「美知代の作品中には実名や名前を変えたりなどして、たびたび兄弟妹が登場するところがある²²」と指摘しており、「大火の後」の場合も同様に、ます子という名前は萬壽代（ますよ）をもじつたものであると推測される。萬壽代の生年は一八九八年であり、「神田大火」が起きた時期は一四歳だったと推測される。仏英和高等女学校の本科は「年齢満十二歳以上」からで修業年限は「四ヶ年」であることから時期的にも萬壽代が所属していたとしてもおかしくはない。以上より、萬壽代がます子のモデルであると推定される。そのため、もしも美知代が話を聞いたとすれば萬壽代からであろう²³。

記録性が表れている場所として、例えば、「焼けた品物を片附ける人夫の傍に立つたきり、馬鹿かと思うやうな呆然した容子の主人らしい男」や「大通りの両側には太い針金の柵が結はれて大勢の警官が見張つて居た。その一方の人道が開いて、其処から沢山な人々が出入つて居る」といった描写や先述の「仏蘭西大使館」の「年若い貴婦人」など、被災地で見られたと考えられる多くの事象を描き込んでいることが挙げられる。また、被災地に関する情報についても、被災地に近づくにつれて「午前二時記」の新聞から翌朝の「御用聞」の噂話「号外屋」の焼失箇所が「二面黒く塗られた」新聞、「今やつと非常線を解いたばかり」という「巡查」の言葉というように、より情報は具体的になり、同時性をもっていくという特徴的な描か

れ方をする。

逆に被災地から「駿河台の武田さん」へ向かい、被災地から遠ざかる際は「火事場から可成り離れたところでも、商店と云ふ商店は、皆な大戸をおろして、店を閉めて居りました。(中略)でも駿河台間近へ来ると、平生の通り商店は商売をして居りました」と描かれており、「見舞」の品を買いたいです子の目を通して被災地の周縁部ともいえる商店の様子が描かれている。被災地の記述だけではなく、ます子の空間移動を通じて火災に関する情報が錯綜する様子や被災地周辺の状況も描かれており、火災を複層的に描くことに成功していると考えられる。

他に、慶子の立場に関してであるが、「遠い北海道に伯父様があるばかり」で迎えが来ないという状況は、被災者に「貧民階級」が「極めて少なく或一部の人を除いては悉く親戚知人等の世話になつて居る」という特徴を持つ「神田大火」では少数派の事例だったと推測される。そのような人物を主人公の一人として配置することで「或一部」とされていた被災者の中の少数派を前景化させることに成功したのではないかと考える。

三、少女小説に描かれた避難

「大火の後」は被災地に関する描写の記録性が高く、火災を扱った少女小説の中でも特徴的な作品であることは確認してきた。一方

で、「大火の後」に描かれた避難は「火事の晩」で描かれた避難と共通する点を持っている。それは、「大火の後」における舎監の「見苦しくないやうに、取り乱した身装をつくらつてから、一時も早く安全な場所に立ち退かねばなりません」という言葉からわかるように、避難の際にも「身装」をつくらう必要があったことである。²⁷⁾つまり、火災という緊急時においても「見苦しくない」服装や振る舞いをする少女が共通して描かれたのである。「火事の晩」においては、「規則と申すのは、まづ着物、袴、足袋をキチンと着けること、髪を乱さぬ事、一番大切な物三種類以上の袋に入れてもちだすこと、濡手拭を必ず持つ事、草履をはくこと」として、同様の服装に関する描写が「規則」として登場し、「火災に包まれゆく野呂さん」においては、他の作品のように直接的に服装に関する記述が行われているわけではないものの、避難の際に「帯をしめる」という記述が見られるということ、火事の場面の挿絵に描かれた二人の少女が着物を着ていることから考えて、避難の際に「見苦しくない」服を着る少女が描かれたと考えられる。

ここで、現実の避難の様子はどのようなものであったかを確認していきたい。『百合学園創立百周年記念誌』においては「神田大火」は文部省認可直後に起きた「思いがけない災禍」として大きく取り上げられており、以下のような証言が掲載されている。

何事かと寝台をそとと抜け出し、よろい戸の隙間から外をのぞいて驚きました。火の粉が校庭に降っています。しかし、マ・メール・オウグスチヌは「私の命令があるまで寝ていなさい」と申されました。私は、ともかく靴下をはいてベットの中に戻り、マ・メールの「命令を待ちました。やがて「早く起きて大切な物を3階へ取りに行くように」とのことでした。あの頃は子供のことして、さして大事な物などありません。小箱に入っていた人形と襟巻を抱えて外に出ました。そしてご命令通りに2列に並び、髪の毛は羽織の中に入れ、小さい方の手をしっかりと握って歩き出しました。³⁰⁾

服装に関しては「靴下」と「羽織」についてしか確認できず、「大火の後」のように舎監から服装を整えるように言われたとは考えにくい。そのため、避難に関する描写は美知代による創作によるところが大きいと考えられる。

ここで、現実の避難に関する規則がどのようなものであったかを確認したい。ただし、仏英和高等女学校の規則を確認することはできなかったため、同時期の他の女学校の規則や避難に関する言説から予測するしかない。長野県私立松本高等女学校の「寄宿舎生徒心得」においては「火災其ノ他の変災起レル時ハ決シテ狼狽輕率ニ陥ルナク直チニ舎監ニ通知シテ其ノ指揮ヲ受クベシ若シ通知ノ時間ナ

キ時ハ最モ沈着機敏ニ臨機ノ処置ヲ取ランコトヲ期スベシ」とあり、服装に関する記述は確認できない。青森県立第一高等女学校においても同様で「舎監ノ指示ヲ受クベシ」とされているだけである。³¹⁾

しかし、雑誌『台湾愛国婦人』の「東京雑信」において「記者の嘗て関係せし都下某女学校の寄宿舎非常心得」の「火事」に関する心得として「夜間に於ては、迅速に衣装を著け得るやう、平素の覚悟第一なり、其為前夜枕頭に一切を整理すべき」や「逃出す時、通常の衣装の上に羽織を重ぬべし。手拭と櫛とを忘るべからず」と紹介されている。³²⁾ 紹介された「寄宿舎非常心得」が確認できなかったため事実かどうかは断定できないものの、火事からの避難に際して服装を整えることが規則として定められていたというケースも存在した可能性があると考えられる。また、近藤浩一「路『校風漫画』」(博文館 一九一七年九月)において日本女子大学の火災避難訓練の様子について「先づ髪を乱さぬ事、必需品二品を持出す事の二要項を実行して寮を飛び出し運動場に整列する」、「各生徒を点検してまわると袴を裏向けにはいたもあり」と述べられており、避難の際に服装を整えていたことについて記述されている。³³⁾

また、男子学生の避難規則としては、岐阜県立農林学校の「火災消防及避難細則」において「本校内ノ火災ニ際シテハ其儘ノ服装ニテ(後略)」、「本校近傍ノ火災及消防演習ニ際シテハ正帽正服脚絆靴着用運動場(中略)ニ集合シ当直舎監ノ指示を受クヘシ」として、

服装に関する規定が確認できた。これまで確認してきた言説と男子学生の規則からの推測であるが、実際の女学生の避難行動についても服装が規定されていた可能性は高い。

問題は、男女共に避難の際に服装を整えることが規定されていたと推測できるにも関わらず、これまで確認してきた三作の少女小説や『校風漫画』など、女学生のみが避難時に服装を整えるイメージと強く結びついたのかということである。それは、おそらく服装に関するジェンダー規範がそれだけ強力なものであったためだと考えられる。

久米依子は、「こうして少女読者たちは雑誌の誌面を通じて、どのようなまなざしが自分たちを「愛らしい」と捉え、尊重するのか学ぶことになった。メディアが先導し位置付けた新しい少女像、読者自らが積極的に取り込み、内面化する」と指摘する。「大火の後」においては『「どうだ、綺麗ぢやないか』／火事場に集った弥次馬共は斯う嘸き合つた。そして、聖母マリヤにも似た尼僧の後につゝく晴着姿の少女達を、絵のやうに美しく思つて見るのであります」として避難する少女達を審美的な目でまなざす「弥次馬共」が登場する。また、「火事の晩」においては慌てたために服が乱れている生徒は「一々滑稽な服装」と描かれ、互いの服装を笑い合う一方で、服装をしっかりとっていた仙子は「一年に似合はずよく整つてゐる」と先生から「誉められ」る。これらの反応から火災という危険な状

況においても見られる対象として「見苦しくない」服装や振る舞いをするのが「あるべき少女像」として形成されていたと考えられる。つまり、少女小説は避難に際して服装を整えるべきであるというジェンダー規範を「あるべき少女像」として強化する方に働いたと考えられる。

おわりに

以上、「大火の後」に関する分析を行った。これまで確認してきたようにこの作品は「神田大火」を扱った作品であり、その発表までのスパンも短い。おそらく、読者は実在の火災を「題材とした」あるいは「記録した」作品であるという読みのコードを用いて作品を解釈した可能性が高い。美知代自身のこの作品についての言葉が残されていないため推測するしかないが、作中に挿入された新聞記事という形式から、おそらく、自然主義の影響だけではなく、新聞社に勤めていた永代静雄の影響もあったのではないかと考えられる。その点で、「大火の後」は他の少女小説と比較しても特徴的な作品であるということができないのではないかと考える。

また、焼け跡が危険だと言う「父」や「巡査」の制止を振り切り焼け跡へと向かい、その惨状を見るとますます子の主体的な人物像も大きな特徴だろう。これは、美知代自身の取材、あるいは、モデルの存在といったような現実の体験がこのような人物造形を可能に

したのではないかと考える。意図的にそのように造形されたのかはわからないが、危険な焼け跡での記録を通して、ます子という人物は見る主体としての位置を獲得したのではないか。

一方で描かれた避難行動の表象からは、大正期の女学生の避難行動へのイメージが読み取ることができたのではないかと考える。それは火事という危機的な状況に際しても服装を乱すべきではないというものである。危険だとされている焼け跡に向かうます子が描かれた一方で、火災の中にあっても服装を乱すことが許されないということは、逆にいえば、それだけ服装に関するジェンダー規範が強力なものであったと考えられる。

現代の目から見れば緊急を要する火災からの避難において服を着替えることが描かれるのは奇妙に感じられる。しかし、それは「災害文化」が定義するように、避難行動に対するイメージや表象もまた社会的に構成されたものであり、時代や地域によって異なるものであるということだろう。

注

- (1) 日本自然災害学会『防災事典』(築地書館 二〇〇二年七月 項目名「災害文化」項目執筆者林春男) 引用に際して「」を「」に改めた。
- (2) 有元伸子「広島の女性作家・岡田(永代)美知代研究(1) ―研究の現状と課題―」『内海文化研究紀要』三九号、二〇一一年三月
- (3) <https://home.hiroshima-u.ac.jp/okadamiichyo/index.html> (二〇二一年

三月十九日閲覧)

- (4) 相澤芳亮「女性作家・岡田(永代)美知代論―小説『英文のお手紙』の一考察」『立正大学大学院日本語・日本文学研究』一三号、二〇一三年二月、有元伸子「永代美知代の少女小説にみる〈労働〉」『内海文化研究紀要』四二号、二〇一四年三月、遠藤伸治「岡田美知代と『蒲団』―自然主義と少女小説―」『国文学攷』二二二号、二〇一四年三月が挙げられる。

- (5) 他に「神田大火」を描いた文学作品として永井龍男「石版東京図絵」(一九六七年一月〜六月『毎日新聞』)がある。なお、『石版東京図絵』内では「神田大火」に関して、鈴木野勤「神田の大火」(『細工師 足立屋 五代物語 4代篇』建具工芸社 一九六六年七月)と仲田定之助「火事―下町っ子(二十)―」(『新文明』十四巻五号 一九六四年五月)が引用されている。また、子供向けの読み物として被災者の少年天羽良司にインタビューした「神田の大火事」(『幼年の友』五巻四号 一九一三年四月)がある。

- (6) 「烈風中の大火」(『読売新聞』一九一三年二月二日朝刊 三頁)を参考で作成。焼失戸数や火災の時間などの具体的な数字は火災直後の混乱のため新聞各紙で異なっているが、本論ではそれほど問題とならないため、『読売新聞』の情報に基づいた。

- (7) 美知代の夫であった永代静雄が勤務していた『東京毎夕新聞』の記事が典拠となった可能性が高いものの、確認する限り「神田大火」が起きた翌日、一九一三年二月二日の『東京毎夕新聞』を所蔵する図書館・資料館はなかった。

- (8) 「神田の大火」(『朝日新聞』一九一三年二月二〇日 五頁)
- (9) 出火の時間については各新聞で見解が分かれているものの、深夜であることは共通している。出火元と出火時間については以下の通り。「神田

三崎町の大火」『東京日日新聞』一九二三年二月二〇日二頁・七頁欄外）
においては今晚二時二十分頃神田区三崎町より出火せり、神田の大火
『都新聞』一九二二年二月二〇日二頁 欄外）においては「今晚二時
四十分神田三崎町二の救世軍殖民館より出火し」と報道されている。

(10) (図…1) 作中同様、被災地が示された実際の新聞においても、黒く塗
られた消失区域の中に「二六、仏英和学校」として含まれている。

(11) 「焼けた学校」『読売新聞』一九一三年二月二日朝刊 三頁)

(12) 「原田家のこと」『白百合学園創立百周年記念誌』白百合学園 一九八二
年二月。なお、同時代の資料の「原田熊雄君」(古林亀治郎編『現代
人名辞典』中央通信社 一九二二年六月)に「神田区裏猿楽町六」とい
う原田熊雄の住所に関する記述がある。

(13) 「▲大使館の感謝」『読売新聞』一九二三年二月二日 五頁)に「昨
暁神田の大火に際し仏国大使館も危険に瀕せしが幸に警官及び兵士の尽
力により類焼を免れたるを以て非公式に我政府に感謝し来れり」とい
う記述が見られる。おそらく、そのような出来事あるいは新聞記事を基
にして書かれた場面であると考えられる。

(14) 「十三 高等女子英仏和学校」(太田英隆『男女学校評判記』明治教育会
一九〇九年二月、「第二章 高等女学校」(岩崎徂堂編『男女東京修学案
内』大学館 一九一一年九月)を参照。

(15) 「十三 高等女子英仏和学校」(太田英隆『男女学校評判記』明治教育会
一九〇九年二月)

(16) 「聖母マリアにも似た尼僧」というミッションスクールであることに
ついての記述や「焼け残りの煉瓦塀」という建物の特徴に関する記述
も、仏英和高等女学校を想起させたのではないかと考える。なお、仏英
和女学校の「赤煉瓦」が焼け残ったことは「▲夜の焼跡」(『朝日新聞』
一九一三年二月二日朝刊 五頁)において「■仏英和女学校の焼残り

たる赤煉瓦は、大砲小砲の瘡痍を受けたる古城の石壁にも似て雄々しく
も亦凄惨成り、(後略)として、「灰燼の神田街」△損害の程度計上すべ
からず」(『読売新聞』一九一三年二月二日朝刊 五頁)においては「仏
英和女学校の焼け残った」▲赤煉瓦の壁が宛ら敗残の古都ボムベイのや
うな凄惨な姿を見せてゐる同校の避難所を訪ねると(後略)と取り上げ
られている。

(17) (11)に同じ

(18) 「火災に包まれゆく野呂さん」(『少女世界』十卷三号 一九一五年三月)

(19) 三津木春影(二八八―一九一五年)は少女小説の他に、怪奇小説と探
偵小説を中心に多くの少年小説を残している。

(20) 三津木春影「火事の晩」(『白金の時計』岡村盛花堂 一九一四年三月)

(21) 府中市上下歴史文化資料館を通じて、原氏に尋ねていただいた。

(22) 相澤芳亮「女性作家・岡田(永代)美知代論―小説『英文のお手紙』の
一考察」(『立正大学大学院日本語・日本文学研究』十三号、二〇一三年
二月)

(23) (22)に同じ

(24) 「第二章 高等女学校」(岩崎徂堂編『男女東京修学案内』大学館
一九一一年九月)

(25) さらに言えば、「英文のお手紙」において萬壽代は実名のまま、実暦は
「純兄様」という名前で登場していることが相澤芳亮「女性作家・岡田
(永代)美知代論―小説『英文のお手紙』の一考察」によって指摘されて
いる。作中で彼らは同じ家に住んでいる。そのため、当時萬壽代は岡田
美知代の兄であり夏目漱石の後任として第一高等学校教授をしていた実
暦の家に住んでいたと推測される。実際の萬壽代の父は上下町の実家に
いたと考えられ、おそらく、「大火の後」では二十歳年齢が離れた実暦が
「お父様」として脚色されて描かれたのである。また、作中でまず子が

電車に乗る「曙町の停留所」の「曙町」とはおそらく本郷区駒込曙町を指していると推測されるが、岡田実麿は『日本紳士録 第十六版』（交詢社 一九一一年二月）によると「本郷区駒込富士前町三」に住んでおり、富士前町と曙町は隣接している。そこから、岡田実麿の家から「曙町の停留所」へ徒歩で向かい、そこから電車で焼け跡へと向かったと考えられる。なお、途中で「屋敷町の細い小路」を通ることが述べられているが、おそらく曙町の土井利興子爵の邸宅及び私道を指していると推測される。「駒込曙町」（東京市区調査会『東京市及接統郡部地籍地図 上巻』一九一二年十一月）参照。

(26) 「神田大火余聞」（『朝日新聞』一九一三年二月三日 五頁）

(27) 重田真義・鍛治恵「日本のねむり衣の歴史」（『睡眠文化研究所・吉田集而編』『ねむり衣の文化誌 眠りの装いを考える』冬静社 二〇〇三年三月）より、「浴衣がねむり衣として一般大衆に用いられるようになるのは、明治から大正にかけてのことである」という記述と「パジャマが一般的に紹介されたのは昭和初期」という記述があることから、おそらく眠る際に着用していた服は浴衣であると推測される。

(28) (20) に同じ

(29) (図2) なお、挿絵は「野呂さん」が逃げ遅れた「佐野さん」を助ける場面を描いたものである。「野呂さん」の着物は二つ前の挿絵（他の生徒から陰口を受ける場面と思われる）と同じ柄である。

(30) 「安藤姉の回想」（(11) に同じ）

(31) 「寄宿舎生徒心得」（『長野県松本市立高等女学校一覽』長野県松本市立高等女学校 一九〇八年九月）

(32) 「仮寄宿舎細則」（『青森県立第一高等女学校一覽』青森県立第一高等女学校 一九〇七年二月）

(33) 歌橋「東京雑信」（『台湾愛国婦人』十二巻 一九〇九年二月）

(34) 近藤浩一路「火事の練習（女子大学）」（『校風漫画』博文館 一九一七年九月）。また、「珍態奇趣はさながら百鬼夜行を眼前に見るやうである」として服装を乱した女学生を滑稽化して描いている。ここからも女学生の服装に対して作用していた強力なジェンダー規範が確認できると考える。

(35) 「火災消防及避難細則」（『岐阜県立農林学校一覽』岐阜県立農林学校 一九一七年一月）

(36) 管見の限り、少年向けの小説で「大火の後」などのように避難する際に服装について記述している作品は確認できなかった。

(37) 「構成される少女I——少女雑誌の創刊と少女セクシュアリティの発見」（久米依子『少女小説』の生成 ジェンダー・ポリティクスの世紀』青弓社 二〇一三年六月）

(38) (20) に同じ

— おくむら・なおひろ、広島大学大学院文学研究科博士課程前期在学 —

